

学習の質を高めるための授業の在り方に関する一考察

田平 佳祐・溜池 善裕

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第8号 別刷

2021年8月31日

学習の質を高めるための授業の在り方に関する一考察[†]

田平 佳祐*・溜池 善裕**

富山市立堀川小学校*

宇都宮大学共同教育学部**

「学習の質の高まり」とは、以前につくっていた学習よりも質の高い学習をつくれるようになり、その高まりが低下しないことである。そのためには、一人の子どもの学習だけではなく、共に学習をする仲間の学習の質をも高め、それを維持することが必要である。子どもたちは授業で、仲間の話を聞き合うだけでは、学習を自律的に高めることは難しい。どのように仲間の話を聞き合い、その自律性を生かしつつ個々の子どもの学習の質が高まる授業を展開していくべきかについて、授業記録や個々の学習を手がかりに考察した。

キーワード：学習の質、着眼点、具体化、自己選択

1. はじめに

筆者はこれまで、単元における学習を進めていく際、子どもの思いや願いを大切にしてきたが、その際、子どもが学習する姿の全てを「自分らしさ」と捉えて実践してきた。しかし、その結果、子どもは自分自身もつ思いや願いの実現に向けて取り組むことができたのかもしれないが、一方で、単元のねらいとして教師が構想した資質・能力を育むことができずいたり、ある特定の子どもだけしかそのねらいに到達することができずいたりしたことは否めなかった。本稿では、学習の質を高めるために、授業を視点とし、学習の質の高まりのため授業の在り方を考察する。

2. 研究主題及び研究方法について

(1) 「学習の質」が高まるプロセス

「学習の質を高める」という考え方には、子どもたちが自分の学習を自分自身で思考を深め続けていく、自律的に学習していく姿が前提にある。そして、今

年度の「社会科・総合 いたち川」の子どもたちの学習の様子からおよそ次のようなプロセスを取るという立場をとる。①自分の生活経験を基にした興味・関心を着眼点に学習対象と出会う。②学習対象がもつ事実を発見する。③それらの事実から自分との関わりの意味を見いだす。④その意味の吟味を通して学習対象から自分自身の在り方を考える。⑤自分の価値判断による自己選択を伴った学習を進める。

(2) プロセスに応じた指導方法の仮説

このような立場で考えるならば、単元全体を通して教師の支援の在り方は画一的では不十分である。なぜならば、先の②から④は、単元進行における学習の深まりであり、⑤は④を経た後の子どもの学習の姿であるが、個々の子どもにおける②から④の局面を見極めた支援の在り方が必要だからである。そこで、学習の質を高めるために単元の中で子どもたちに応じて指導する仮説を以下のように設けた。

<仮説ア> 学習対象との出会い (①) では、子ども歩み出しの取組を励ますことで、自分の着眼点を足場とした学習ができるようにする。

学習対象の出会いから、自分の着眼点を基にして学習の足場をつくっていく。このプロセスでは、学習の足場形成によって、子どもが自分のくらしの充実を実感するようなきっかけをつくることが重要である。そのため、授業では、子どもの取組の歩み出しを認めたり受け止めたりする指導が求められる。ここでは仲間の話を基に、取組に迷う子どもがそれ

[†] Keisuke TAHIRA*, Yoshihiro TAMEIKE**: A study on lessons for improving the quality of learning

Keywords: the quality of learning, point of view, materialization, selfselection

* Toyama Municipal Horikawa Elementary School

** Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

を参考にしたり、既に取り組んでいる子どもが仲間の取組に疑問をもったりするであろう。

<仮説イ> 学習対象に内包する概念を獲得する過程(②③)では、事実をより具体化する指導をすることで、自分との関わりに意味を見いだせるようにする。

学習対象の概念を獲得していく際には、数多くの事実を発見する。例えば、聞き取りや観察を通して、あるいは学習対象にはたらきかける実際の活動(本単元ではいたち川の清掃活動等)を通して、子どもは「自分としての」事実を発見する。したがって、授業では子どもが事実にした過程(学習過程)に関する指導が必要である。具体的には、それを事実とした際のプロセスの不十分さを考えたりするような、学習への取組方(学習過程)の指導が必要である。

<仮説ウ> 学習対象から自分自身の在り方を考える過程(④)では、自身の考えの立場を明確にする指導をすることで、自己選択から自分の在り方を考えられる(⑤)過程に移れるようにする。

複雑に関係し合う事柄を事実とした子どもたちは、それでもなお、学習を進めていこうとするが、関係し合う事柄は社会における「問題」と深く関わり、そのため矛盾する関係にある。したがって授業では、その矛盾における自分の立場、つまり矛盾の中で自分は何を問題とし、その問題をどのように解決しようとしているかを明確にする必要がある。そのため、これまでの考えの経緯を聞いたり、願いをたずねたりすることが不可欠であろう。そうした仲間の話を聞くことを通して、仲間の自己選択、つまり、矛盾の中での自分の学習の在り方の吟味と選択から、自分自身の在り方を考えるプロセス(⑤)へと移行していくであろう。

(3) 研究の方法

- ・第4学年 総合・社会「いたち川」
- ・観察対象児(U児：仮名。以下子どもの名前は全て仮名である)1名の学習の歩みを中心とし、仲間との関わりを考察し、上記の仮説の妥当性を検討する。子どもの側からしか学習指導の在り方を考察できないと考えるためである。
- ・これまで自分の思いや願いを語ることが多かったU児が、これまで事実に向おうとしていたことや、他にも在籍するN児やA児のように次第に事実に向う児童と同様の学習プロセスを踏んでいるため、観察対象児として挙げる。

3. 観察対象児の学習過程

(1) 現地活動・授業・くらしの時間¹を繰り返し、学習対象に愛着が芽生え始める

単元の提示の時間では、子どもたちの興味・関心や生活経験が十分に思い起こせるように、子どもたちのつぶやきや反応を大切にしたい。その結果、単元名を聞いた子どもたちは、いたち川に棲んでいそうな魚だけではなく、いたち川の周辺にいそうな虫の生き物を予想した。また、校区を流れるいたち川の位置を確認することや、ごみが流れているのか、どうなのかについて周辺に住む子どもたちが知っていることを話した。その中でU児は、「川が大きかったら綺麗にするのも大変そうだな」と話し、川を綺麗にする取組から、これからの学習の方法を考えた。このようにして、子どもの発言を共感的に聞くことを教師が行うことで、子どもたちは自分がイメージするいたち川について考えた。そうして迎えた初めての現地活動では、自分のイメージを確かめるために、いたち川の周辺にいる生き物を見付けたり、実際に川に足を入れたり、川の水濁りを確かめるためにペットボトルに水をすくったりして、U児は次のように作文を書いた。(以下、四角囲みの文章は全てU児の作文からの引用。)

6月17日日記 私の知らないいたち川 作文(1)

いたち川に行って驚いたことがありました。水の濁りのことです。いたち川の近くに住んでいる人が、「いたち川の水は濁っているよ」と言っていたので、すごく濁っているかなと思って、ペットボトルに汲んでみると、今にも飲めそうな透明な水でした。

現地活動①の後に授業①を行った。子どもたちの発言を丸ごと受け止めていくことで、現地見学①で受けた現実とイメージの違いから、それぞれの子どもの願ういたち川のイメージが湧いてきたり、曖昧な事実をもう一度現地で確かめなくてはいけないと考えたりすることをねらった。授業では、N児が「コロナの関係で人がいなくてごみが少ない」と話す一方で、T児が「魚はごみで泳ぎたくないんじゃないか」と話し、1回の現地活動で分かった事実と考えを出し合った。このような話を聞いたU児は、「い

¹ 対象を豊かに感ずる心聞き合う子どもの姿を願い、毎日行っている。

たち川の水はすごく汚くて、泥水みたい。でも水を汲んでみて、こんなに綺麗ななんて思ったのね。やっぱりごみは少ないと思う」と発言した。自分の予想に反して、いたち川が綺麗であることがU児には分かったのである。また「実際に行って調べてみないと分からない」「行ってみたい」といった子どもたちの発言があり、翌日改めいたち川に行くことになった。設定した子どもたちの現地活動②で出会った地域住民からは「県はお金をかけてくれない」「昔は魚や生き物がいっぱいいた」「雑草が伸び、流れてきたごみが草に挟まる」という話を子どもたちはじっくり聞いた。その際にU児が書いたのが以下の作文(2)である。

6月25日 現地活動② 必要な存在 作文(2)
一番心に残っていることが2つあります。1つ目は、川の近所の人の話です。お金が無くて生えている草も取れなくて、川がどんどん草まみれになっていってしまうのかなあと思いました。2つ目は魚のことです。姫川さんたちが魚を捕まえていてその魚が死んでしまって、悔しいです。やっぱり生き物は大切にしないとダメだと思いました。だから川は生き物や近所などの必要な存在だと思いました。

授業①では、「綺麗」と自分のイメージを再びもったU児であったが、この地域住民との出会いによって、そのイメージは違っていることを目の当たりにし、生き物や地域住民にとっては「必要な存在」のいたち川として考えて始めた。そして迎えた現地活動④(7月3日実施)では、川の中のごみには皿の破片があったことにも気づき、このような現状で、魚が本当に棲むことができるのかと考えている。活動後には、「帰り・くらしの時間」に白川さんが話したことに、以下のように尋ねている。(以下、記録抜粋は全て破線四角囲み)

【7月3日帰り・くらしの時間⑨ 記録抜粋(1)】
U児 何でS児さんは、種田さん(地域住民の方)の話の聞いただけで、そう思えるの? 種田さんだけでは情報提供が少ないと思う。10人くらいに詳しく聞いてからって思うけれど、どうして?
S児 だって、10人に聞いても情報を集めたわけ

じゃない。1人に聞いて、その人のことを解決してから、次の人にいきたくないって思う。

U児 S児さんがいたち川の近くの地域の人じゃないのに、その地域の人、何も知らない人を助ける白川さんがすごい。知らない人にインタビューをしても、困っていることがあっても私は助ける方法を思い付かないし、まずは自分の町内を助けたらいいと思う。多分、白川さんは自分の町内といたち川の町内の両方の人を考えているんだなって思った。

足掛かりは偶然だったかもしれないが、清掃活動に協力しようと志すS児によって引き受けられた「事実」を基に、自分の「事実」を吟味しているU児が垣間見られる。そして迎えた現地活動⑤(7月13日実施)では、U児はホースの切れ端や乾電池等、これまでの現地活動では見たことのないごみが落ちていたことを仲間と共に発見した。また、仲間が捕まえたタニシの観察に加え、いたち川にどんな生き物が棲んでいるのかを調べ、棲んでいる10種類の生き物を仲間にも伝えている様子が観察された。このようなU児を含む多くの子どもたちについて、図画工作科の学習と関わらせて、いたち川をじっくりと眺める写生会(7月17日、21日)を設定した。U児は写生会を経てくらしの時間で話をしている。

【7月22日帰り・くらしの時間⑩ 記録抜粋(2)】
U児 写生会で、前よりも時間がたくさんあったから、細かい部分までやれて作品にしようかなって思ったのね。まだそんなにいたち川のことが分かっていないけれど、①いたち川を私はちょっと大切に思ってきているから、大事に描こうと思ってる。下書きはまあまあ。②色が勝負かなって思う。色付けをして、それだけでいたち川の風景が伝わってくるような作品にしたいなって思う。魚がいない、川が少し汚い、他の川に比べるとそうだから、いたち川を大切に、私のいたち川になっていくといい。

U児の発言からは、S児のような話を聞くものの、現状のいたち川の姿を見てもなお傍観者であると捉えることができる。傍観者であるから、「下書きはまあまあ。色が勝負かな」という、本来は解決しなくてはいけないはずの問題であるにもかかわらず

に、色の塗り方のレベルになっているのであろう。しかし、いたち川に足を運ぶ・調べる・絵を描く活動を通して、【記録抜粋(2)】下線部①のようにいたち川のことを「大切に思っている」自分になってきていることには気づき始めている。そして、これほど大切に思っているいたち川であるからこそ、下線部②のように仕上げたいと強く思っていることがうかがえる。このようにして、いたち川への思いは確かに募っていき、家庭での調べ学習に邁進し、くらしの時間では次のように話した。

【7月29日 朝・くらしの時間② 抜粋記録(3)】

U児 ①家でもできる、川を綺麗にする方法を調べたのね。できるだけ水を汚さない工夫を調べたことをまとめてポスターにして、知っている人やいたち川を通りかかった人に、いたち川をもっと綺麗にするために水を汚さない工夫を家でしてもらいたいなって思う。一人一人の行動でいたち川を少しでも綺麗にできると思う。

N児 でも、シャンプーとか無駄な量を使わないだけで川は綺麗にならないと思う。石鹸やシャンプーの量を無駄に使っても、川に影響はないと思う。

U児 確かにどうしても無駄な量を使ってしまうこともあるけれど、いたち川のことを心に思っている人が少しでも綺麗にするために頑張っているんだなってことを伝えられれば、関係ないかもしれないけれど、いたち川だけではない川にもいいことがあるし、川の全体のことを考えていると思う。

ごみを拾うことや、ごみを捨てないことだけではなく、自分ができることがあると考えたU児は、家庭でもできることを見つけたのであった。しかしN児から、シャンプーを無駄遣いしないことがいたち川とどのような関係があるのかを言及されたが、それに対しては明確に答えることができなかった。そのため、「川の全体のことを考えていると思う」と答えるだけになってしまっていると考えられる。このようにして迎えた授業②では、「水を汚さない家でできる工夫をポスターにして、少しでも気を遣ってくれるだけで、魚が救われるなら私はいいなって思う」と話し、ポスターを作った。そして、どこ公園周辺の町内会長の方に連絡し、夏休みに掲示

をしてもらった。ポスターには、川を汚さない工夫や、意見を聞くためにメールアドレスや学校の住所も記したりした。

共感的に聞く指導を丁寧に行うことで、初めは漠然とした学習対象への関わりであっても、次第に自分の興味や関心が礎となった学習の足場形成によって、子どもが自分のくらしの充実を実感するようなきっかけをつくることができるのではないかと考える。また、その過程では、体をかけた取り組みを重ねるため、学習対象への愛着も湧いてくる。

(2) 事実の根拠を確かに求め合いながら、社会構造の矛盾と出会う

夏休みには、県内の川のごみの状況を調べたN児、校区外のいたち川を観察したS児、海の様子を調べたH児がいた。調べてきた事実をくらしの時間を中心にして仲間に紹介する日々が続いていった。そのようにして迎えた現地見学⑥では、子どもたちはいたち川で初めて大量の稚魚を目にするのであった。

9月24日 現地活動⑥ 作文(3)

今日、ごみを取った中で、一番多かったのはお皿の破片です。ガムテープや缶のような物もあったのに、魚がいました。小さい魚だけど、どうして小さいのばかりなのかなあと思いました。多分、食べる物が無いし、ごみばかりだったから上手く長生きしなかったんだと思えました。

ごみがあるにもかかわらず、そのようないたち川にも魚たちが多く棲んでいることに気付いた。また、それらの魚の大きさが小さかったため、ごみの影響で大きく育たなかったのではないかと予想をしている。つまり、人間のくらしが魚に影響しているのではないかと考えられずにはいられない状況なのではないだろうか。ちょうどこの頃、原因不明のアユの大量死についての話題がK児からくらしの時間にあがった。県内では高級魚の一つとして知られてるアユが大量に死んでいたのである。

【10月15日朝・くらしの時間④ 抜粋記録(4)】

U児 多分、アユが死んでいるのはごみせいじゃないかな。多分。

T なるほどねえ、多分ってことは、推測だよねえ。

U児 熊野川（富山市内を流れる他の川）もごみがあって、アユが食べてしまったのかなあ。いたち川も同じなのかわは分からないけれど。

Z児 どうしてU児はゴミだと思ったの？だってごみだったら「原因不明」にならないよ？

T 今、可能性の一つとして、ごみを引き合いに出してきたU児は何でってことやと思うよ。

U児 いたち川だけじゃなくて、他のどこでもあり得るんじゃないかなあって思う。

U児は自分の考えを主張することで、教師やZ児から事実なのかどうかと指摘されたのである。そしてU児は、以前ポスターにまとめた生活排水ついて文献資料を基に、下水処理を改めて調べ直した。すると、「ほとんどの川が下水処理をされないままに流れている」ということを知った。さらにU児は富山市内の状況について調べてみるとそれとは異なる事実に気付く。そこで、市内の下水処理場に問い合わせると、下水処理場の方からは、「いたち川にも下水が完備されていない地域では基準を満たした生活排水を川に流している」ことを知った。U児は改めて現地活動において川の様子を眺めて次のように作文を書いた。

10月20日 現地活動⑦ 今日には川に入らないからどんなごみな流れてくるのかを調べる 作文 (4)

ゴミがあるのに何で？ 魚や虫はどうしてごみがあるいたち川にいたのかなあと思いました。下水処理の人は「水が汚いのは人のせい」と言っていたけれど、魚がいたち川にいたから、何で生き物がいるのかなあと思いました。

下水が完備されていないいたち川周辺の家庭から流れる生活排水が流れている中でも、生きている生き物たちを目の当たりにしたのである。このようにして迎えた授業③では、次のように話をした。

【10月27日 授業③ 記録抜粋 (5)】

U児 今まで下水処理場について調べてきたのね。図鑑に「下水処理場で処理されずにほとんどの水が河川へ流れて行く」って書いてあったからどうなのかなって思って、富山市の下水処理場を調べると「綺麗にしている」と書いてあった。

どっちが事実か分からなかったから、いたち川の下水処理場の上下水道局に電話したのね。水道管が設備されていない地域は少しは汚い水が川に流れているけれど、基準を満たしているようで。でも、私は何か完全に綺麗に流してほしいなって思ったし、法律でも汚いままに流したらダメって書いてあったから、法律についても調べたけれど、最終処理場で最終的に処理されているけれど、でも、水道管が設備されていない地域では少しは汚い水が出てしまう。人も自分のゴミを捨てないで、いたち川が綺麗になってほしいと思った。下水処理場が汚いままに川に流していることではないから、あとは人がゴミを捨てるせいだから。ポイ捨てを無くせば川が完全に綺麗になる。

このようなU児の話聞き、O児が現地活動当初から拾っているごみの種類を紹介したり、G児が「もはや川の近くの人だけの問題ではない」と話したりした。生活排水は最終処分場で処理させているといえども、ポイ捨てをしてはごみが川に流れてしまう。また、生活排水が流れてしまう地域は家庭での取り組みが欠かせない。どちらにせよ、川を綺麗にするためには、人間のくらしを変えていくことが必要であると考えるU児である。

10月27日 日記 少しでも綺麗になっている!! 作文 (5)

下水処理場に電話をしたときに、「下水処理場では、綺麗にしていたち川に流れていますか」と質問すると「法律でも汚い水のままでは川に流してはダメ」と話していました。その法律を調べました。すると、「最終的に処理されて河川等に流す」と書いてありました。少しでもいたち川の水が綺麗になるように、最終的にも処理されているから、あとは人が出すごみを減らしたいです。

いたち川に内包する問題解決を仕事としている方を通して「事実」を相対化していくのである。下水処理場で水を綺麗にしている、そのように法律で義務付けられているというのは、先の漠然とした学習対象への足掛かりや、白川さんのような問題解決に関わろうとする仲間を通しての相対化のプロセスを

辿っているU児だからこそ発見できる「事実」である。しかし、これは行政として行っていることであり、また法律に基づいているという意味では、誰もが認めることのできる「事実」である。しかし、このような「事実」の性質が、U児の学習に変化をもたらし始めていることが次の作文（これまでの自分の取組を振り返り）からもうかがえる。

11月1日・作文 作文(6)

いたち川の周辺の地域に住んでいる人が「魚が昔よりも減った」と話していました。昔は魚がたくさんいて、釣りをする人もたくさんいたようです。しかしプラスチックなどが増えてしまっていたち川にポイ捨てをする人が増えてしまっていたち川にポイ捨てをする人がいて、そのごみを魚が食べてしまってどんどんいたち川にいた魚が死んでしまって魚が減ってしまいました。でもプラスチックはとっても便利です。だから私は便利な社会になっていくとゴミが増えるのではないかと思います。そこで富山市の方に説明をしていただいた3Rの3つのRを守ったらゴミは確実に減ると思います。

自分たち人間のくらしが「便利な社会」になっていくに伴い、どうしてもゴミが増えてしまという社会構造の矛盾を指摘している。しかし、今のようなくらし、つまりプラスチックなどの製品にも恩恵を授かっていることを否めないU児は、ごみとして扱うのではなくて資源として活用することの意味を改めて考えたのである。

そうして迎えた現地活動⑧では、本当にごみのポイ捨てだけが原因ではないのかを確かめたU児たちであった。その結果、いたち川だけではなく、水が流れていない場所（例えば、いたち川周辺にある石垣や川へと続く道路）にもゴミが落ちていた。そのため、ごみのポイ捨てなのかどうか事実が分からなかった。このようにして迎えた授業④では、継続的に調べたK児がアユの大量死の件について「細菌とかはなかった」とごみの影響による酸欠を指摘したり、Y児がニュースの特集を例として挙げ「道路にごみを捨てたら最終的に川に流されて、海とかに行ってしまうから、魚的にはものすごい迷惑だし影響がある」と話したりする中で、次のように話す。

【11月12日 授業④ 記録抜粋(6)】

U児 結局は川にはポイ捨てはしていないけれど、路上にポイ捨てをして風で飛ばされて川に行ってしまう。川に直接ポイ捨てをしていなくても川に行く可能性がある。路上にポイ捨てをしても川にポイ捨てになる。もしかしたら、風で飛ばされて、一人のポイ捨ての人は路上に捨てただけでも、川には影響ないと思って捨てていったんだと思う。路上に捨ててもダメだと思う。

どこに捨てるのではなくて、結局は人間が捨てたごみは川に辿り着いてしまい、川の生き物だけではなくて、海の生き物にも影響してしまうことが明らかとなった。そして、ゴミが落ちている場所について作文には次のように書く。

11月12日 授業④ 川に捨てる生き物が死んでしまう 作文(8)

ポイ捨ては一番川がいけないと思いました。路上に捨ててもダメだけれど、路上から川に行ってしまうかもしれないけれど、そのまま路上にごみがあったら嫌だなあと思うけれど、人間は当たり前だけれど、ごみを食べようとはしません。でも川は海にもごみが行ってしまうと、魚はごみと間違えて食べてしまいます。だから川に捨てるとうちで死んでしまう生き物がいてしまうから川はダメだと思います。

ポイ捨てという事実がどのようにして、海の魚と関わっているのかを考えているのと同時に、生き物ではなくて、人間の視点からその事実について考えていることが分かる。人間のくらしに便利な製品が捨てられた結果、多くの生き物が食べてしまう危険性があり、影響が出てしまうことを考えている。

そのような中、名水を守る会の会長に来ていただき、意見交換をする機会があった。U児は、会長との話の中で下水処理について質問をする。完璧に処理されているのならば、自ら家庭で取り組む必要もないのではないかと考えられるが、「汚い水を下水処理場に流すと、下水処理場に負荷がかかり、よくない」ということを知るのであった。そして会長は「水は最後には人間に影響する」「名水百選に選ばれている」「昔の川は汚かった」と話を聞いた。その

後の現地活動⑨では、大きな魚が浮いて死んでいるのを見かけた。

11月25日 日記 なぜ死んでしまった 作文(9)

サケのような魚が死んでいるのを見付けました。それでまず思ったのが、川のあたりは下水管が設備されていないのかと思いました。でも川の周辺が必ず下水管が設備されているわけでもありません。ポイ捨てのごみを食べてしまった可能性もあります。どうして魚は死んでしまったのかを知りたいです。

魚が死んだ原因を、人間の暮らしに問題があることを推測しているU児であった。川のごみを減らすことで、川に棲む魚は生きることができるのではないか。そのためにポイ捨てを無くすことが完全であればいい。あとは人間の問題であると考えているU児であったと考えられる。しかし、迎えた授業⑤では、N児が「いたち川だけ環境がよくなっても、SDGsが達成できないから、いたち川だけじゃなくて、日本の川とか全部を考えていった方がいいと思う」と自分たちの取組に異を唱えた。N児は川の綺麗を示すBOD基準を例に挙げながら県内の川の様子を話した。BODの数値を下げていくことで綺麗な川になると思っていた子どもたちであったが、F児が「汚い水にしか棲めない生き物たちが、きれいにされると困る」と、BOD環境基準に棲むことができる生き物を基準別に示した表を提示した。さらに、K児が「世界の川も海とつながっているから、この問題は解決でない」と話し、いたち川が抱える事実から構成される複雑な問題の解決の困難さに直面した。これらの話を受け、U児は次のように作文に書いた。

12月9日 授業⑤ 全ての魚は救えない 作文(10)

綺麗な川でも棲めない魚たちがいることを初めて知り、救えない魚の命があると思いました。少し汚い水でしかくらしせない魚たちもいるなら、BODをよくたつて、魚の命の全ては救えないと思います。ポイ捨てをしなければ魚は救えると思っていただけ、違っていたから全ての魚の命は救えない。

自分たちが解決しようとしている問題が、自分たちだけでは解決することが困難ではないだろうかと考えたり、自分がこれまで考えてきた取組では、たしかにいたち川は綺麗になるのかもしれないが、そこに棲む生き物の環境を考えるならば、既に棲んでいる生き物たちの環境を変えてしまうかもしれない、結果としてすべての魚を救うことができないのではないかと考えたりしている。学級ではその後、矛盾した状況をどのようにして解決していけばよいのかを考え、富山市環境政策課の方に取組を聞いた。

12月21日 富山市環境政策課SDGs 分解するだけで400年も 作文(11)

SDGsと海洋プラスチックごみ問題を教わって、それぞれに思ったことがあります。SDGsで富山駅の南北接続もSDGsにつながっていることを知って住み続けられる街づくりにつながっていて、ただ、便利になっただけだと思っていたけれど、環境にもつながっていることがすごいと思いました。海洋プラスチックがペットボトルを自然分解するには400年もかかると知って、ごみを分解するだけなのにこんなにかかるんだなあと思いました。

行政や地域住民の方、NPOも取り組んでいるにもかかわらず、いたち川は汚れている。しかし、長期で見ると、いたち川は魚の棲める綺麗な川になっている。その状況下において、どのようにいたち川という対象に向き合うかは、そういう複雑に関わり合う矛盾した「事実」をどうにかして変えようとするに取り組むことである。それは、「事実」を変えようとするを通して「事実」そのものを相対化する、つまり「事実」はそれを自分が事実にするものであることに向き合い、自分としてそれをどのような「事実」にしていくかに取り組み、その取組を授業で仲間の力を借りながら、自分で相対化していくことにつながっていくと考えられる。

(3) 社会構造がもつ事実の矛盾から自分の在り方を吟味する

1月の富山市は、大雪に見舞われ臨時休業になった。臨時休業明け、いたち川の様子を見に行った。周辺には雪かきをする地域住民がいたり、交差点には車の衝突からの車の破片が数多く落ちていたりした。いたち川周辺の柵も破壊され、川に大量の雪を

流している光景、現地活動を行っている公園も大雪の山になっていた。

1月21日 日記 気を付ける 作文 (12)

雪が汚れていたことについて、土が付いて雪を川へ捨てると雪は水になるけれど、土は濁っていき、濁った水で魚が死んでしまうのではないかと思います。雪を捨てる時には気を付けたいです。

家庭へ帰ってからも雪とごみのポイ捨ての事実について考えていたことがうかがえる。ここでも自分たちの暮らしを保つために、魚たちが犠牲となっているのではないかと推測し、依然として人間の暮らしの便利さとの矛盾を抱えていることがうかがえる。

このようにして授業⑥では、H児が「川の汚い所に棲む生き物が漢方や娯楽等の人間の役に立っている」と話をした。この話を聞いて次のように話した。

【1月27日 授業⑥ 抜粋記録 (7)】

U児 人の生活に必要な食べられる魚が生き残ってればいい。人が食べられる魚がもしなくなったら、お寿司屋さんとかも魚がいなくてつぶれてしまうし、生き物より人を優先するのね。できる限り生き物を全部救いたい気持ちは大事だけど、でも人のことを優先しないと、人が食べられる魚を優先して絶滅しないように対策した方がいい。

Z児 どうしてU児さんは、今のままを保てば、食べられる魚が絶滅するわけでは無いのに、どうして食べられる生き物を優先するの？

U児 ごみが増え続けると魚よりもごみの方が多くなってしまふ未来があるから、ごみがポイ捨てが増え続けると、人間の食べられる魚も絶滅するから。

今のままのいたち川の現状を見ていると、魚が食べたごみを人間が食べてしまうために、人間の暮らしにも影響が出てしまう。全ての魚を救うことができないかもしれないが、人間の暮らしを「優先」することを選ばざるを得ないU児なのがある。

1月27日 保てない 作文 (13)

このままのポイ捨てが増えてしまうと、人が食べる魚も絶滅してしまうのかなあと思いました。Z児さんが言っていた「このままを保てばいい」と言っていたけれど、このままポイ捨てが増加していったら保てないと思いました。だから、ポイ捨てがもっと増加してしまつて魚が絶滅したら大変なので、ポイ捨てをもっとやめていかないと、人の食べ物にも影響が出てしまうから、人のためにもポイ捨てはやめていただきたいと思いました。

魚が絶滅することは無いと主張するZ児に対し、これからの未来では、このままの状況が続いてしまうと、魚の量よりもごみの量の方が増えてしまうことから、自分たち人間の暮らしに影響が出てしまうことを否めないU児なのである。人間の今ある暮らしを考えるならば、そういつてはられないU児のではないだろうか。授業⑥が終えてからの振り返りにも次のように書いた。

1月29日 魚は全て救えないけれど 作文 (14)

いたち川の水は少し汚いと思ってはいたけれど、少し汚いのにごみが増え、もっと汚くなり、魚が死んでしまうことにつながったから、魚を大切にしました。でも「汚い水でしか生きられない生き物もいる」と聞いたとき、綺麗にすればいいとも限らないと思ってはいたけれど、ポイ捨てを川にしすぎてしまうと、人間にも影響が出ると思っています。だから魚は全て救えないかもしれないけれど、人への影響がないような魚だけを残したらいいと思います。

本当はすべての魚との共生を考えたいのであるが、そういつてもこの状況を変えることができないため、自分たちとまずは関わりのある魚について優先したいと考えるU児なのだろう。そして、次の作文からもこのことがうかがえる。

2月5日 できることはしたい 作文 (15)

ポイ捨ては少しでもやめられると思う。この勉強で、ごみ問題に取り組んでいたのも、ポイ捨てが危ないということは忘れないです。ごみ

拾いは続けられるし、ポイ捨ての問題を誰かに伝えることができると思っています。この問題は絶対に解決しないと本当に魚よりもごみが多くなってしまい、人にも影響が出ます。ポイ捨てを少なくするためにできることはやりたいと思います。

子どもの学習が深くなるためには、その学習を行っている自己の在り方を吟味するその方法を子どもが習得する指導が必要である。U児自身が複雑に関わり合う矛盾した状況を解決するために、自分なりの事実として獲得していくこと、そして、それを構造的に捉えながら、自分の足場を大切にしながら自己選択することが学習を深めていく。

4. 考察

<仮説ア>に関して、子どもたちは漠然とした学習対象に学習の足掛かりをつかむため、教師は学習対象に試行錯誤したり触れ合ったりする子どもに対して励ますことで、自分の着眼点から学習対象と関わったり、学習対象に次第に愛着や切実感といった子どもなりの思いが湧いていく。また、このような指導により、教室内に民主的な学級風土が醸成され、自分の着眼点を基にした発言をすることができると考えられる。

<仮説イ>に関して、自分の着眼点から客観的事実を獲得していく。同時に、仲間や学習対象に関わる人・もの・ことを通して相対的に事実を子どもたちが自分との意味を見だしながら捉えていくため、教師は事実を具体化するための支援が必要である。こうすることで、事実を自分なりの事実へと相対化していくことが分かった。また、学級の仲間も自分の知らない事実を知っている仲間の話を聞き、曖昧な事実には指摘し合うことが重要であり、そのことが事実が絡み合う社会構造の矛盾と出会うことになるため、自分の学習の在り方を振り返ることになる。

<仮説ウ>に関して、社会構造がもつ事実が複雑に関わり合っていることを知った子どもたちは、自分との関わりの中で、矛盾を乗り越えるために事実から自分の在り方をみつめる。そこで、更に学習を進めていくときには、当初の自分の足場を基にして自己選択をする。これまでの学習経緯と共に、どのような世界を願っているのか子どもの考えの背景にあ

る仮説と構想を明らかにする指導が必要である。事実そのものを相対化しようとする子どもの原動力のきっかけは、単元当初の教材にたいする思いが湧きたってきたことがきっかけではないかと考えられる。

5. おわりに

子どもが学習する際、単元の当初から「自分らしさ」をもって取り組んでいるのではなく、単元と正対するために自分の生活経験や興味・関心から「着眼点」を基にしていることが考えられた。また、単元の終末にかけては、学習対象に働きかけることで見いだした、そこに内包され複雑につながる問題から、自分自身の在り方を問いながら、解決に取り組む。その解決に際に行う自己選択にこそ「自分らしさ」があり、そこに至ることが学習の質を高めることである。さらに、学習の質を高めていくためには、教師の支援だけでは不十分であり、共に学びを深め合う仲間の存在が必要である。

一方で、学習の質を高めていくためには、ある単元、ある授業だけでは不十分である。日々の各教科等を通して見方・考え方を育む授業を今後は展開していく必要がある。その際は、子どもたちが疑問・問題・問いをもてるような、中心單元における指導と、それが他教科等に広がりつつ教科特有な学習の仕方を体得する指導を考える必要がある。

※本研究はJSPS:20K02727の助成を受けた。本論文は、全文を田平が執筆し、字句や構成を溜池が修正して成った。

令和3年4月1日 受理

A study on lessons for improving the quality of learning

Keisuke TAHIRA, Yoshihiro TAMEIKE